

# 平和と共存、 異文化理解

この学科で勉強を始めて早くも3年が経ちました。私がこの学科を選んだ理由は、途上国について、平和について知りたかったということでした。これまで様々な講義を聴き、世界のこと、日本のことを学んできました。NGOのこと、国際協力のこと、発展途上国のこと…いろいろな本を読んできました。外国の文化はもちろん、政治経済などなど。その中でも感じたこと、思ったことは、世界は本当に平等なのかということでした。また、一つの国を調べるだけでも大変なのに、本当に世界を正しく、誤ったフィルターを通さずに、理解することはできるのかも思いました。いまだ衣食住満足の出来ない生活を強いられていたり、戦時下にあり、安全の保障のない生活をしている人はいます。学校に通えない、読み書きが出来ない人も大勢います。また、男尊女卑の文化がある国も

あります。そうかと思えば、日本を始めとした先進国では、物質的な豊かさに反して、自殺率の高さや就職難など、いろいろ問題も山積みです。世界全体で見ても、資源や人口の問題などがあります。人種や宗教はどうでしょうか。私は日本人としてそのあたり理解することが難しいように感じます。でもやはり正直言うと、西洋への憧れと劣等感がある気がします。過去にあった植民地支配、オリエンタリズムとか…。私たちは共生することはできるのでしようか。大学生として、私は何ができるのでしようか。勉強して、ただの自己満足にならないように、それを活かして行動することが大切だと思っています。今ある問題を知ることが大事だし、そこから始まると思います。その上で自分なりにどう捉えていくかが大事だと思っています。答えは人それぞれだと思っています。自分自身のこと

で精一杯だと思いますが、世界は広いようで狭く、今起こっている出来事は決して他人事ではないのだと思います。今、しきりにコミュニケーション能力が求められているということを耳にしますが、やはり人と向き合って対話をするところから始まるように思います。その中からおのずと他者への共感、思いやりが生まれるのだと思います。その上で、想像力は大切だと思います。文学は、想像力を養ってくれるものだと感じます。例えば『夜と霧』、『アンネの日記』を読むことで、ナチスのこと、ホロコーストのことが自分の中に内在化されてよりいつそう理解を深めることができると思いました。村上春樹も、『アンダーグラウンド』では地下鉄サリン事件のこと、『1Q84』では9・11のことについて触れています。人々に癒しを与えるほかに、問題提起をさせる意味合いもあると思います。詩

外国語学部  
国際文化交流学科3年

田村 有梨

も、大きいと思います。

「覚えていてほしいことがあります」

オリーブの枝をいつでも差し出していることをちっぽけな枝と思う人もいるかもしれませんが私たちが欲するのは敬意です

ささやかな尊厳と敬う心

これは高望みなのでしょうか」

平和の象徴をオリーブで表現しています。私たちの感性に訴えています。また、詩人のナイは、

「ある者はヘルメットをかぶり、

大きなマシンガンを手にするために生まれ

ある者はやせこけ、ぼろの身なりをし足を撃たれるために生まれる。

またある者はなぜ、なぜ、なぜ、と問うために生まれる」

という詩を通して、私たちに問いかけています。

エドワード・サイードはまた、本を読むこと

について非常に示唆に富む話をしています。「学生たちに到達してもらいたいのは、知と読書はつね

に未完のものであるという境地です。」「書物とは

選択の行為である、つまり著者や社会が関わる一連の選択や過程の結晶なのです。」「いわば理解・

情報・知のネットワークの一部」と言っています。

「本をありのままに、たんに本として読むのではなく、それを文脈のなかに置き—なに—ごとも原因な

しでは起こらないのですから—どうやってその本が世に生まれたのか、理解する方法を教えるのです。」と批判的に読むことの大切さを説いています。文学作品だけではなく、本を読む行為全般についての姿勢を教えてください。さらに、

「大規模製造文明の衝突ではなく、必要なものは、文化と文化がゆっくり協力し合うことに目を向けることなのだ。それらの文化は、重なり合い、お互いから力を借りたりする。さらに、矮小化され、一時的な理解では得ることができないほど、はるかに興味深い方法で共存することができる。」と述べています。

ダルウィーシユは、

「アイデンティティについては、と聞いてみた。

それは自己防衛のことだ

アイデンティティとは生まれつきのもの

しかし結局、それは自分で作るもの、過去を引き継いだということではない。私は集合体だ

私の中には新たな外部がある。」

と述べています。

グローバル化が進むなかで、私たちは密接に関わりあって生きています。国や人種、宗教の壁を越えて、私たちが協力していくことが求められていると感じます。遠い海の向こう、私たちの物質的な満足を満たすために、チョコレートやダイヤ

モンドなどを巡って子どもが搾取されていたり争いがおきたりもしています。価値観や生き方も多様化しています。善悪はつきりつけられないこともあるでしょう。しかし大切に思っていることは、根本的には同じだと思います。みんなひとりひとり等しく命があつて、愛し愛されているのだと思います。互いを理解し合うこと、平和を希求することは幻想なのでしょうか。しかし私は、一人ひとりの心がけ、意識、行動を起こせば、世界は変えられると信じたいです。

### 1 ネオミ・シーハブ・ナイ

アラブ系アメリカ人を代表する詩人、小説家。

### 2 エドワード・W・サイード

コロンビア大学教授、比較文学者。

著書は『オリエンタリズム』など。

### 3 マフムード・ダルウィーシユ

パレスチナを代表する詩人、ジャーナリスト。

1969年ロータス賞、82年レーニン平和賞受賞。

### 参考文献

● 小泉純一『アメリカに響くパレスチナの声

サイード、ダルウィーシユから、ネオミ・シー

ハブ・ナイへ』白水社（2011）

● エドワード・W・サイード『文化と抵抗』

筑摩書房（2008）